

ニュース レター

News
Letter

No.20・21

CONTENTS

| | |
|---|-----|
| 松田所長 巻頭言 | 1 |
| 関東学院大学シグマソサエティの活動 | |
| 「国際理解とボランティア」研究プロジェクト 勸田義治(客員研究員) … | 2~3 |
| 「ヒトになる」と「奉仕」について 武田俊哉(所員) | 4~5 |
| 客員研究員の広場 | 6 |
| 松本洋幸(客員研究員)「坂田祐」研究プロジェクト所属 横浜開港資料館調査研究員 | |
| 加賀谷真梨(客員研究員)「いのちを考える」研究グループ所属 法政大学非常勤講師 | |

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

巻頭言

所長 松田和憲



2008年度もまもなく終ろうとしていますが、ここに関東学院大学・キリスト教と文化研究所「ニュースレターNo.20・21」を皆様のもとにお送り致します。この小冊子から今年度の活動の様子を読み取ってくださり、今後も研究所に対する変わらぬご理解とご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

さて、今年度の当研究所の活動を顧みて想うことは、以前にも増して、それぞれの研究グループ、プロジェクト・チームが、自主的に研究活動を続け、独自のプログラムを立案、実施してきたことにあると言えましょう。研究所の活動も多岐に亘り、内容の点でも充実してきたことから、研究所としての形態が少しずつ整ってきたことが良く判ります。その点で、所員、研究員、客員各位のボランタリーな積極的参加に心から感謝を申し上げます。

2008年度の主な活動の幾つかを紹介するならば、その第1番目としては、当研究所の2008年度版の所報『キリスト教と文化』（第7号、2009年3月発刊予定）において、関東学院創立125周年特集号として、坂田祐の東京帝国大学提出の卒業論文「預言者エレミヤ（大正4年）」の一部を掲載することができたということです。これは、当時高名な旧約学者であり、その論文審査の主査であった石橋智信氏から高い評価を得たもので、エレミヤ書全体を総合的に研究した労作であり、研究所として、以前から何らかの形で出版したいと願っておりました。この度、創立125周年記念の第1段階としては、6章からなる論文のうち、1～2章を解説文に合わせて掲載することになったことは、大変喜ばしいことと思っております。編集作業につきましては、加納政弘先生が文語体で難解な文章を精読され、筆者の意図を損なわないよう配慮しつつ、読みやすいように書き改めてくださいました。この場を借りて、先生のお働きに心から感謝申し上げます。今後、出来るだけ早い機会に3～6章まで掲載できればと願っています。第2の点は、今年も各グループ、チーム主催、共催の形で、講演会、シンポジウム等を活発に開催したという点です。詳しくは、このニュースレター、所報等でお読み下さり、その所産を共有していただければと願っています。第3番目としては、年度当初に出版計画を掲げた『バプテストの歴史的貢献2』は2009年春出版を目指し、『バプテスト教科書』も2010年4月か5月刊行を目指して、鋭意努力中であり、その出版が待たれる処です。

最後に、2008年9月16日～17日、当大学・金沢八景キャンパスにおいて、日本基督教学会・第56回学術大会を開催し、当研究所は事務局を担当致しました。お蔭様で、無事終了できましたことも、皆様のご支援とご協力の賜物と、心から感謝申し上げます。

皆様の上に、主の守りと導きを祈りつつこれにて失礼致します。

日本基督教学会・第56回学術大会事務局 ホームページ

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs3/56HP/>

関東学院大学シグマソサエティの活動

客員研究員 勘田 義治

2009年3月8日。それはタイ北部山岳少数民族アカ族の集落に5棟目の教会堂が献堂される日として記憶されると同時に、本学公認学生ボランティアグループ関東学院大学シグマソサエティのメンバーにとっては、



2005年3月
チェンライ県アカ族ボン村
学部生による教会堂建設作業

準備に多くの時間と労力を費やした今年度の海外ボランティア活動を無事完了させた日として、忘れられない日になることであろう。2005年3月にアカ族への支援活動としては最初の教会堂が献堂され、以来4年間、学生による国際ボランティア活動はメンバーの新陳代謝を繰り返しながら、引き継がれてきた。2005年(2004年度)の活動に参加したメンバーの一人は、夢であった国際線航空会社に就職し、いまや成田空港でグランドスタッフとして頑張っている。また彼女の後輩の一人は、将来国際協力のプロになることを夢見て、現在は旅行会社添乗員として世界各地に派遣されるかたわら、飢餓問題と語学の研鑽に励んでいる。おそらく彼女もまた、国際支援団体あるいはNGO・NPOの一員として世界を舞台に活躍してくれるであろう。

関東学院大学シグマソサエティは、発足後10年を越えているが、近年学内では次第にその名と活動内容が知られ、現在は文学部、人間環境学部、経済学部などの学部生30名で構成されている。彼らは学内活動のみならず、多くのNGO・NPOのメンバーと交流や活動を行い、互いにその熱意と活動に温かいエールを送り合っている。活動のメインはタイ北部山岳少数民族への支援活動であるが、現在はアカ族の集落に毎年1棟



2004年2月
バンコク市内ロムガ子どもセンター
学部生による保育園実習作業

ずつ教会堂を建設している。教会堂はシェルターを兼ね、台風などの災害時の避難場所になるだけではなく、村のコミュニティセンターとしても使われることを目的とし、村民の要請によって建設され、子どもたちの識字教育、青少年や婦人の社会活動や生活の向上を考える場として村民によって活用される。また学生と村民が一体となって行われる建設作業は現地バプテスト派教会組織によってコーディネートされ、共生の精神を学生と村人が学び合う場となっている。

一方タイの首都バンコク、あるいは第2の都市チェンマイにおいて、バプテスト派教会組織関係者や現地NGO、そして国立チェンマイ大学教員および学生には、関東学院大学シグマソサエティはなじみの定期的訪問者となっている。バンコクでは低所得者の居住区にある子どもセンター（保育園）を訪問し、幼児教育と保育の実習として準備したプログラムを行い、チェンマイではHIV被害者の孤児院や少数民族山岳民族への教育・救済シェルターでの実習を行っている。また今年度より本学と提携関係を結んだ国立チェンマイ大学では、人文学部日本語学科の教員、学生と共に国際交流プログラムを行っている。



2005年3月
チェンライ県アカ族スカセム村
学部生による支援活動

現在、関東学院大学シグマソサエティのこの活動における大きな意味は、建学の精神と校訓「人になれ奉仕せよ」の実践の場を学生が自ら作ることである。具体的にはタイ社会という現場で、短い期間ではあるが人々と生活を共にし、自分の目で見て、自分の耳で聞いたことを問題として捉える必要がある。つまり現場に住み生活している人々と共に考え、教育環境や生活環境などの問題を解決する方法を見つけ出すことである。



2007年2月
チェンライ市アカ族子供寮
学部生による支援活動

このような学生ボランティア活動の意義を考えたとき、まず頭に浮かぶのは、現地で支援や援助を必要としている人々の姿や言葉である。彼らに会ってその姿を見、言葉を聞き、直接協力の手を差し伸べるには、お互いに何が必要であるかを考えることである。アカ族での支援活動を行う以前、カレン族の村に支援に出かけたメンバーは、彼らの母校である小学校や中学校のご父母や教師、あるいは大学の友人たちの協力を得て集めた古着、文房具やスポーツ用品、楽器などを届けて、日常生活や学校生活の支援という大きな貢献をした。しかしこの物資による支援はもちろん重要であるものの、学生でなければ出来ないことではなく、大学という教育機関が行う課外授業としては限界があった。

現在は引率教員や現地コーディネーターがプログラムをセットするだけではなく、参加学生が毎回テーマを持ち、事前現地調査活動を行い、その調査結果に基づき活動内容を構築し、計画を立てて準備し、実施している。また活動結果を論文や研究会、展示会などで発表し、スポンサーを募り、活動資金を捻出している。

単に物資を届けるだけではなく、人々が自立し、より良い環境で生活するために、人々が出来ることとは何かを共に考えることを活動のテーマとしている。これは活動が単なる奉仕活動の後の満足感で終ることなく、出会った人々と「共に生きている」という実感を学生達が、そして現地の人々がいつまでも持ち続けることが出来るように、という思いに他ならない。

「ヒトになる」ことと「奉仕」について

所員 武田 俊哉

ヒトは、地球に暮らす生物として特異な存在であることは異論のないところだと思います。歴史上、他の生物と比較すらできない存在であるとされてきた期間の方が遙に長く、ダーウィンの「種の起源」(1859年)で提示された進化論は大きな衝撃を呼んだと伝えられています。20世紀には生物について多大な知見が蓄積されました。遺伝子の本体としてDNAの構造を特定示したワトソンとクリックの「二重螺旋」が報告されたのが1953年。ヒトとチンパンジーでは、98%ものDNAが同じであることが今では知られています。

ヒトは他の生物とどこが異なるのだろうかという問いは、ヒトは他の生物、特に近縁のチンパンジーなどの類人猿と案外同じなのだという提示と平行して問い続けられている話題です。デズモンド・モリスの「裸のサル」が出版されたのが1967年。その挑発的ともみえる文章のためもあり多くの反発もあったように思いますが、その後も進化論やチンパンジーなどの類人猿について動物行動学は、心理学、脳科学など現代の科学の諸分野と相まって、ヒトの起源についての探求を進め、毎年のように多くの著作が出版されています。

本稿では、進化論などの諸科学の視点から見た場合、ヒトとはどのような生物として捉えられているのか、特に他の生物と比べて特異な立場を有するに至った根拠についての概観を試みました。進化論自体は反証困難な理論体系であるため、科学と言い切ることの難しさを内包していると指摘されていますが、ヒトと他の生物の構造・機能の類似性について説明する理論としての妥当性は認められていると思います。

チンパンジーの祖先とヒトの祖先が分岐したのは約700万年前と推定されています。その後の早い段階で、「直立二足歩行」が生じたと考えられています。

直立二足歩行により自由になった両手により道具の使用が容易になったこと、長距離の移動に有利であること(比較的低いエネルギー消費で移動を行えること)、大きくなる脳を支えることができること、そして声帯の位置が下降して多様な発声を行うことが可能になったことが指摘されています。脳の増大と声帯の下降は、続く言語の発生に結びついたと考えられます。

しかし、二足歩行や道具の使用は、チンパンジーでも行うことができないわけではありません。言語の使用はヒトに特有ですが、ある種のテナガザル(類人猿の一種)で特定のフレーズの歌のような掛け合いで情報を伝達することが報告されており、言語の祖形ではないかと指摘されています。ヒトの使うような言語の発生には脳の増大が必要であると考えられますが、脳が増大すること自体は、脳の成長を止めるタイミングが少し遅れば達成できるであろうことが推定されています。つまり、ヒトを特徴づけるこれらの形質は、偶然の変化で生じる素地は用意されていたと考えられているのです。問題はこれらの形質がなぜヒトという種に固定されたのかという点にあります。

進化論では、突然変異により偶然得られた形質のうち、その生物の生存や繁殖に不利益な性質は続く世代の中から失われていくと考えます。例えば脳はエネルギー消費の高い器官ですので、何かの利得がなければその増大は不利な形質として遺伝の過程で失われてきたはずです。そこで、直立二足歩行、脳の増大、言語の使用などによりヒトはどのような利得を得たのかということが問題となります。現代に至る文明の発展を前提としない、種として生まれたばかりのヒトにとって何の利得があったのかという問題です。

この点については議論のあるところのようですが、

初期のヒトの生活形態の影響が指摘されています。他の類人猿のように森林の中で果実を主食としていた状態から、ヒトは草原へ生活の場を移したようです。草原では、食物の安定した供給もなく、捕食者の危険も伴います。初期のヒトは安全な場所にベースキャンプをもち、外へ食物を採取に出かける生活を営んだと推定されています。遠距離移動と荷物の運搬に適した直立二足歩行がこの点で役に立ちます。また情報交換、特に遠隔地で得た多様な情報を交換する道具としての言語の使用も有益となったでしょう。

この説で重要なことは、このような生活形態が可能となるには、遠隔地で採取した食料を待っているヒトたちにも配分するということが前提となるということです。そしてヒトの社会ではそのような食の配分が見られると指摘されています。自分の獲得した食を他者へ配分するという事は、生物にとっては当たり前の行動ではありません。チンパンジーなどの類人猿でも肉などの配分が観察されていますが、主に権力関係の確認などの道具に使われているようです。ヒトは採取した食料を「分け与える」のではなく「共に分かち」点において他の生物と異なるということです。特に文明化されていない社会では、無償の奉仕とも言える食の配分が観察されるということも報告されています。

この食の配分を支えているのは、言語使用の基盤ともなっているであろう「他者理解」であると思います。言語が情報伝達機能をもつためには、話し手にとって、聞き手が同じ言語を理解するであろうことが認識されていなければなりません。霊長類の脳の活動についての研究によると、他者の動作を観察しているとき、自分が同じ行動をとったときに働く部位（ミラーニューロンと呼ばれます）が活動していることが1996年に報告されています。他者の行動を自分の行動としてなぞっているということです。脳の増大は、この他者理解能力の向上に大きく寄与していると考えられます。チンパンジーにおいては、傷ついた他者を慰める行動が観察されていますが、ヒトではさらに自己のことも他者のようになぞるこ

とで自意識が発達したとみられます。ヒトは他者のことを理解するとともに、自分の「行すべきこと」を知ることができます。このことが食の配分を前提とした共同社会を安定させ、現在の特異的な人間社会を形成する根拠になっているものと思われます。

以上のように生物としてのヒトの成立根拠を概観したとき、「ヒトになる」ための根源にあるのは、他者のために自己のなすべきことをする、「奉仕する」精神であったと考えられます。「人になれ奉仕せよ」の言葉は、生物としてのヒトの根拠に対応していると考えられるのです。

利他行動が生物学的な起源をもつことは、ダーウィンが既に示唆していることでもあります。E.O. ウィルソンの「社会生物学」(1975年)などで、これまでも提示されてきましたが、その度、賛同とともに反発にもさらされてきました。しかしながら、ヒトの社会を基礎付ける生物学的基盤として利他行動の存在が無視できないものと、近年のヒトを巡る研究で支持されているように思われます。

私は細胞を使った研究開発を行っていますが、ここに述べましたような動物行動などの諸分野を専門とするものではありません。自分の理解不足や誤解など多々あるかと思えます。お気づきのことがございましたら、ご教示頂ければ幸いに存じます。


 研究員・客員研究員の**広場**
客員研究員 **松本 洋幸**

「坂田祐特別資料研究」のプロジェクトに、客員研究員として参加させて頂くことになりました松本洋幸と申します。私が勤務しております横浜開港資料館は、日本の開国、横浜の開港期から、昭和初期までの、横浜に関する歴史資料を内外から収集し、それらを展示・出版・閲覧・HPなどで、一般に公開している歴史資料館です。2009年1月28日から4月19日まで、企画展示「横浜開港と宣教師」を開催し、ネイサン・ブラウンの業績や幕末～明治初期の翻訳聖書等を紹介しています。関東学院大学からも貴重な賛美歌等をお借りし、関係者の方々に多数お越しいただくなど、大きなご支援を頂いているところです。

このプロジェクトにお声をかけて頂いたきっかけは、2007年の8月から10月にかけて開催した企画展示「大横浜を築いた市長・有吉忠一」でした。周知のとおり、有吉忠一は、関東学院の三春台校舎の誘致に深く関わっていた、当時の神奈川県知事です。彼は1925年から1931年まで横浜市長をつとめ、関東大震災後の横浜再建に尽力しますが、敬虔なプロテスタントで、関東学院の行事等へもたびたび出席し、初代学院長の Tenney とも昵懇の間柄にありました。2008年1月、安田八十五先生のご紹介で報告させて頂き、彼の新たな側面に注目するきっかけを与えて頂きました。

キリスト教の歴史については全く門外漢な私ですが、今後は、坂田創先生による精力的な坂田祐日記の解説のお仕事や、諸先生方の溢れる御学恩に触れながら、昭和初期の横浜における関東学院の果たした役割などについて、研究を深めさせて頂きたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

客員研究員 **加賀谷 真梨**

私の専門は文化人類学であり、これまで沖縄県八重山諸島の小浜島と竹富島を中心に、およそ6年間に亘る断続的なフィールドワークを行ってきました。人口500人に満たない両島の人々が、明治時代以降現在に至るまで、いかに過疎化を回避しながら社会を維持存続させてきたのかを、生業の変遷や年中行事の機能や構造、男性と女性の役割の相違等に注目して明らかにしてきました。私が「いのち」について考えるようになったのも、これらの島で多くのオジーやオバーとの出会いや別れを経験したことによります。

島での生活の変遷を知りたかった私は、研究を始めた当初より70歳以上のオジー・オバーを中心にお話を伺わせて頂きました。彼らが10代、20代の頃の将来の夢や恋愛の話、仕事の内容から記憶に残る事件まで、時には泣き、時には笑いながらお話を聞かせて頂きました。一人ひとりの人生に感動すると同時に、その生き様に尊敬や畏敬の念を強く抱いたのです。ところが、しばらくすると、「長老」という言葉がまさにふさわしく博識だったオジーに痴呆の症状が見られたり、「あのオバーは去年の5月になくなったさ～」などと言われることが頻繁に起こりました。その度に、親族がなくなった時の悲しみともまた異なる、言いようのない悲しさ、寂しさ、そして虚脱感に襲われたと同時に、その死や病を静かに、また当たり前のように受けとめている島の人々に驚かされました。

しかし、私が感じた寂しさと驚きは、「いのち」の多面的なかたちを浮き彫りにしているように思えるのです。すなわち、「いのち」とは「連続」しながら「変化」しているものであり、「時代の象徴」や「知識の引出し」、すなわち「いのち」とは「時代の象徴」や「知識の引き出し」であり、何よりも「社会を支える重要な役割を担っている」からこそ、それが失われた時寂しさや喪失感が生じるのでしょう。また、島の人が静かに死を受容しているのは、その「いのち」が決して島の人々の記憶から消えることがないからではないでしょうか。つまり「いのち」とは「変化」しながらも継続しているものとして捉えられているように思われるのです。そして何よりも「社会を支える重要な役割を担っている」のだと。

最近、学校教育の現場では「いのちの授業」が行われ、親に自分が産まれてきた時の話を聞くといったことが行われているそうです。しかし、そこで想定されている「いのち」の概念は、まだまだ限定されているように思います。今後、本研究グループにおいて多くの先生方と議論する中で、様々な「いのち」のかたちを見出ししていきたいと思っています。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号

TEL : 045-786-7873(研究所直通)

HP : <http://kgujiesus.kanto-gakuin.ac.jp>
発行者：松田 和憲

Director : Kazunori Matsuda